

編集後記

「帯広の森」市民植樹祭が始まって50年を経ました。思い返せば、52年前、大学の卒論の最後に、森の芝生広場にひっくり返って青空を見ている自分がいる。

そのようなことを書いて終わったことを思い出します。夢を夢見ていた時が青春というものだったのでしょうか。人の人生には休みがありません。時は常に進みます。

「帯広の森」に関わって52年経ちました。団塊世代として帯広に生まれ、大学時代は東京に暮らしていました。時代背景は戦後復興から世界に出ていく日本が活性化していった時代です。また様々な矛盾も出てきた時代です。陽と陰が混沌とした時代であって、己を見失いがちな時代でもありました。バングラディシュの独立とヴェトナム戦争があり、国という事を強く意識した出来事でした。そして何よりも人として生きることを考えた時でもありました。そんな日常生活で吉村博市長の近代的田園都市論と出会いました。生まれ故郷に帰ろうと決め、帯広で父の経営する会社に勤めました。爾来、志を同じくする仲間恵まれ、様々な活動をするようになりました。通奏低音として「帯広の森」を価値軸の原点に据えることによって、私の論理体系はなされてきたのだと思います。

「帯広の森」50周年記念事業を迎え、実行委員の一人として携われることは大いなる喜びであります。20年誌30年誌40年誌50年誌と全てに関わることが出来ました。このことは市民だけではなく、帯広市の担当課の皆様と一緒になされて来ました。また50周年事業を展開するにあたっては、帯広市の予算付けはもとより、市民、団体、企業の方々からも多くの協賛金を戴きました事を無くして記念事業は出来ませんでした。ここに実行委員会として深く感謝申し上げます。また記念誌を発刊するにあたりまして、多くの市民の皆様からご寄稿いただき感謝申し上げます。

基調講演をいただきました石川幹子先生。記念誌に特別寄稿を戴きました小池孝良さん、写真絵本の小寺卓矢さん、帯広の森たんけんブックの北海道森林管理局の平田美紗子さん、デザインの檜

山知弘さん、記念誌のデザイン編集の七尾喜弘（大同出版）さんには限られた予算と時間の中で素晴らしい出版をして戴きました事感謝申し上げます。

吉村市長は毎年成人式に四文字の漢字からなる言葉を贈っていました。これは昭和47年市長として最後に贈られた言葉です。

——「草波樹海」（風雪有情より）

アカシヤ、白樺、すもも、など短距離に強いものに、檫、檜、榆、かつらなど長距離を得意とするランナーを配して、“帯広の森”チームを編成したいものである。そのためには、どうしても、全市民の力を借りなければならない。市民一人ひとりに植樹をしてもらい、それを大事に育ててもらいたいと考えている。私は、そういう行為を通じて、はじめて街の伝統というものができののだと固く信じている。（一部略）

「帯広の森」50周年を迎えるにあたり、「グリーンインフラ」という概念に出会いました。

30年くらい前から宇沢弘文の社会的共通資本という言葉にひかれていました。しかし公園という単語は社会的共通資本の中では出てきませんでした。昨年石川先生の「グリーンインフラ」を読み込む中で、社会的共通資本の3のカテゴリーの全てに当てはまるものとして、公園が我々の見えるものとしてあるという事の思いを持つことが出来ました。「帯広の森」は帯広のまちづくりの見える化としては最高の資本として存在しているのです。

今、世界は大きな変化の時かと思います。

日本では十勝は辺境にあります。十勝の経済連鎖は畑作酪畜を地域経済の基盤としています。四季折々が十勝人の日常生活に映し出されています。世界を見ながら日常生活を見ることが出来ます。

50年後に100年経った「帯広の森」は帯広十勝のみんなにどんな姿を見せているのだろうか？

50
—
100

帯広の森 50 周年記念誌

帯広の森 私たちと帯広の森づくり

発行日 2025 年 3 月 31 日

発行所 帯広の森 50 周年記念事業実行委員会

事務局 帯広市西 5 条南 7 丁目 1 番地

帯広市 都市環境部 環境室 みどりの課

編集責任者 帯広の森 50 周年記念事業実行委員会

山田 英和

印刷所 大同出版紙業株式会社

帯広市西 7 条南 6 丁目 2 番地 1



